

手のひらで涙を拭いながら、二階に駆け上がったトンマンをカターンが追いかけて、肩をつかんだ。

「せっかちで、世の中を甘く見て、あとのことも考えず、考えの浅い私をなぜ呼ぶんですか……」

トンマンは後ろを振り向きもせずにしやくりあげた。

「はは、何を言ってるんだ、この子は……」

灯籠の明かりが揺れる廊下の壁に銅の鏡がかかっていた。ほこりが薄く積もったその鏡には、泣くふりをしながら、舌をべろつと出したトンマンの姿が映っていた。このようにふくれたふりをしながら、こよなく善良なカターンをしばしばからかうトンマンだった。

「まったくこの子は。このおじさんがわかつて騙されているのを知るまい」

人の良さそうな笑い顔を浮かべたカターンが懐の中から一冊の本を取り出した。

「何事でもやっつてのけるお前の力にかなう者はいない。だから、みんなお前の助けを求めるんだ。……さあ、お前があんなに欲しがっていた大弘臨国の暦本を持ってきたから、これで機嫌を直してくれ」

「わあっ！ありがとうございます。やっぱりカターンおじさんしかいないわ。私がカターンおじさんのことが一番好きなのわかっているでしょ」

トンマンは両腕でカターンの腰のあたりを抱いて飛び上がって喜んだ。